汝は人狼なりや？

桂まゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
汝は人狼なりや？

【Ｎコード】
Ｎ３０２５Ｉ

【作者名】
桂まゆ

【あらすじ】
惑星探査船「アマテラス」。未開の惑星の調査を終えて帰還する五人の搭乗員たちの間に、不可解な事件が起こる。
「吹雪の山荘」？「孤島の村」？　ミステリではありません。

前編（前書き）

この物語は、空想科学祭２００９参加作品です。

前編

ＡＤ二三八七年、十一月二十三日。

遙かなる新天地を求めて旅立った惑星探査船「アマテラス」は全行程を終え、地球に向けての帰路につこうとしていた。

朝から船内にあるミーティングルームでモニターと睨めっこをしているのは、エンジニアのギルバート・ヘイル。他の搭乗員からは、「ギィ」という愛称でと呼ばれている。

いくら何でも省略しすぎだろうという彼の苦情は、一切受け入れられなかった。白に近い銀色の髪と面長の顔立ちのせいで、「ギィって馬面というより山羊面だよな」と言われている。「山羊面」というのは、普通は悪魔を指さないか？　という疑問にも、明確な返答を貰った事はない。

この船の搭乗員は多かれ少なかれ言葉というものに不自由なのではないかと、ギィは思う。

『ＡＤ二三八九／一一／二三

惑星探査船アマテラスとその乗務員は間もなく惑星識別番号γ―〇〇八一―三五七八―Ｋにおける百二十日の調査を終える事となる。

この惑星が如何なる星系にあり、地球からどれほど離れているのかは、まあどうでも良いだろう。それは前回の調査団の報告書にしっかり書いてある。二度書くのも面倒だし、二度読まされる方も苦痛だろう。

故に、この百二十日で我々が出した結論を、先に報告する。

「大気」が存在する可能性があるとの報告は、正しかった。γ―まどろっこしいので、今後、この惑星のことは「鼠王国（仮称）」と呼ぶ事にする。この「鼠王国」は、地球とよく似た環境にある。惑星の表面積の八〇パーセントが海で、「大陸」に分類されるものは、三つ。島の数を数えれば、きりがない。我々が調査したのは主にＡ大陸だが、気候はおおむね温暖。のほほんとした土地であった。

風土病のサンプルを探していた植物学者の意見によれば「医薬品の飛躍的進歩の可能性が無限大に高まった」という事だ。その学者の言葉を信じるか信じないかは、彼女のレポートを見て判断して欲しい。

資源の宝庫であるというのは、同じく乗務員のカズ・ブランジーニの見解だ。この星の土壌に含まれる成分について、ただでさえ大きな目をきらきらとさせて語ってくれたのだが、それについても別にレポートが添付される予定である。

二度、読むのは読む方にとっては苦痛なのだ。

大切な事なので、二度書いた。

だが、残念ながらこの星には知的生命体は存在しない。少なくとも百二十日の調査では発見できなかった。

代わりに三大陸にもれなく生息する生物をサンプルとして二体、捕獲することとなった。動物学者のユマ・ローレルによって「ミッキー」及び「ミニー」と名付けられた個体である。

体長は大きいもので三十センチ。直立する姿はプレーリードッグやミーアキャットに似ている。体毛は黒から灰色。丸く大きな耳が特徴的で、性格は至って穏和。というか、人なつこい。搭乗員のカズとユマに至っては「可愛い可愛い可愛い……」と一分近くも繰り返した。よく息が続くものだ。

「美味そうだね」という感想を残して二人の顰蹙を買ったのは、ゴリラ女。あのゴリラにとっては、生き物はすべからく喰い物であるのだろうか……』

「あれ、ギィさん」

背後からの声に、ギィは初めて顔を上げて振り返った。

「珍しいですね。こんなに早く起きてるなんて」

カズ・ブランジーニ。ハムスターを思わせるつぶらな瞳の好青年だ。専門は地質学だが、宇宙飛行士たるものには、専門以外にも様々な分野に渡ってマルチな才能が求められる。ギィがカズにもっとも期待する才能は、料理の腕前だった。

特に、彼が作るプレーンオムレツは絶品だ。外はふわふわ、中はとろとろ。勿論宇宙船の中にはコンロもなければ、卵もない。彼のオムレツを地球に帰り着くまで食べられないと思うと、非常に残念だ。

「何を書いてるんですか？　報告書？　どうしてギィさんが書いてるんですか？」

「昨日、リックに拝み倒されたのだ。才能のある奴は辛いな」

「どうせまた、船長を怒らせたんでしょ？　鳥の卵でも持ち込もうとしたんじゃないですか？　どっちにしても船ではオムレツは焼けませんよ」

そう言って、カズが笑う。

図星だったので、ギィも愛想笑いを浮かべただけだった。オムレツは無理でも、工夫次第でゆで卵ぐらいは出来るかと思ったのだが。

船長のリックは、頭が固い。

一切の飲食物の持ち込み禁止とは……今後、この楽園の食べ物を忘れてしまえと言うつもりかとは思いつつも。それが至極当然のことであるのは、ギィだって知っている。

つまる話が、この作戦の参加者の一部が、好奇心旺盛すぎなのだ。

ギィは勿論のこと。ここにいるカズしかり、である。

「しかも、何ですか。このふざけた報告書は」

モニターを見ながら、カズが呆れたような声を上げる。

「せっかく書くなら、面白くないとな。読む方だって苦痛だろう」

悪びれもしないギィに、カズは小さく肩をすくめると、全然別の話を持ってきた。

「それはそうと、紅蘭さんが探していましたよ。昨日、食料庫に行ったんですか？」

「だれが、わざわざゴリラの管轄に行くか」

ギィがゴリラと呼ぶ女は、食料庫の管理役でもある。何度か無断で食料を持ち出していたら、最後には扉に電気ショックの罠まで張ってしまった、ひどい女だ。しかも、他の乗務員はそれを知ってお

り、罠にかかったのがギィだけだったのは、どういう事だろう。
ともあれ罠解除を試してみて、再び電撃を浴びてから一度も、食料庫を訪れた事はない。狭い船内なので、前を通る事は何度もあるが。
「またまた、そんなこと言っちゃって。本当は似たもの同士の癖に」
「何を誤解しているんだ。俺がゴリラと同等だとでも言いたいのか？」
そうじゃないとでも？
と、カズのくりくりとした目が語っている。ギィはあえて気がつかない事にした。
「それはそうと、もうこの星ともお別れなんですねぇ」
「うむ。地球につけば、このメンバーともきっぱりすっきりお別れだな」
「それは、まだまだ先のことですけどね」
なんとなく、しんみりとした雰囲気が漂う。
それを突如うち破ったのは、けたたましい怒声だった。
「ギィ！　てめえ、この野郎！」
ドアが開くと同時に、彼女は叫んだ。
「アタシのバナナ、喰っただろう！」
蔡　紅蘭。何とも美しい名前だ。そして容姿も名前以上に美しい。オリエンタルな美人で、ストレートの長い髪を惜しげもなく結い上げている。本人曰く、「これが一番てっとり早い」との事だ。スタイルも抜群で、黙って座っていればギィだってもしかしたら「美人だな」ぐらいには思ったかもしれない。だが、残念な事にがさつな性格が全てを台無しにしていた。
「アタシのバナナに手を出すとは、良い度胸だな、ギィ！」
凄惨な笑みを口元に貼り付け、ギィを睨む、紅蘭。
「誰がお前さんのバナナなんか喰うか。そもそも「鼠王国」からの食い物の持ち込みは厳禁だ」
取りあえず自分の事は棚に上げて、ギィが言う。

紅蘭が「バナナ」と呼ぶ果物は、形こそ地球のバナナに似ていたが、味は全然違っていた。黄色い皮を向くとゼリー状の果肉があり、ひとくち口にすれば、蜂蜜のようなほの甘さが口中に広がる。上品なデザートだと、紅蘭がいつもおやつにしていた。
「はっはー。残念だったな。バナナをサンプルとして持ち帰る事は船長の認可済みだ」
「どうせワープまでのおやつに喰うつもりだったんだろう？」
「少なくとも、お前に喰わせるつもりはない」
「だから、ゴリラ女のバナナなんぞ喰っとらん」
「誰がゴリラだ！」
「お前さんだよ。ゴリ蘭」
「その口に指突っ込んで、引き裂いてやろうかい！　このハゲ！」
先ほどまでの静寂は何処に行ったのだという、喧噪ぶりである。しかも、悪口のレベルが低い。
「宇宙飛行士の会話とは思えん……」
紅蘭の後を追って入室した船長のリックが額を抑える。
「目くそ鼻くそを笑うって言うんですよね」
カズもまた、苦笑する。
だが、止める気配はない。「子供の喧嘩」を止められるうってつけの人材は、別に居るのだ。
「もう、ふたりとも」
その機を狙ったかのように、二人の間に入って来たのは、ユマ。しゃべり方がおっとりしており、笑うと柔らかいイメージがあるので、はんなり系だと思われがちだ。だが、彼女は真性のツッコミである。
「いいかげんに、しなさい」
いつものように、おっとりツッコミを入れる。
本人は、軽くのつもりである。だがしかし、彼女の特徴はグーでツッコむ事だった。そして彼女は寸止めが非常に下手だ。
破壊力はたいしたことはないが、それでも当たり所によれば相当

に痛い。
今回も、彼女のパンチはギィの顎にめり込んだ。
「にいさんも、ねえさんも。それが大人の会話なんですか？」
別に、ユマは二人の妹ではない。というか、三人に血のつながりは一切ない。
彼女にとって、この船の仲間は家族のようなものだというだけの話だ。ちなみにカズは彼女にとっては弟分らしく「カズくん」と普通に呼ばれていた。
「そうそう、ねえさん。バナナがどうのって騒いでましたよね？おとうさんに聞いてません？」
「だから、お父さんはやめてくれ」と、リックがいつものようにぼやいている。もちろん、その苦情も受け入れられたためしはない。
「まさか、犯人はユマ？」
紅蘭の言葉に、ユマが素直に頷いた。
「ミッキーたちの餌に二本だけもらいましたよ。おとうさん、ちゃんと報告しましたよね？」
リックを振り返る、紅蘭。軽く額を抑えていたリックが、小さく嘆息する。
「その報告は紅蘭にしてくれと言ったつもりだったのだけど、覚えてないだろうし」
「そんなこと、聞いていません」
と、ユマが断言する。そしてこの船ではたいてい、断言した者勝ちなのだ。
「全く話を聞かなかった人もいるし」
ちらりと、リックの視線が紅蘭に向かう。
顔はリックを向いたまま、ゆっくりと、紅蘭の足が後じさった。
自動ドアに向けて。
「待て、蘭」
一連の出来事を見逃してやるほど、ギィは親切ではない。
「ごめんなさいは？」

「ごめーん」
てへっと笑いながら可愛らしく小首をかしげてみせる、紅蘭。あまり似合わない。というか、板についていない。むしろ、無理がある。
「大サービスだな。許してやりたまえ、ギィ」
リックが苦笑しながら促す。仕方がないので、ギィも頷いた。
「怖い物を見せてもらった事だし、許しとこう」
紅蘭が「そりゃどうも」と、再び凄惨な笑みでギィを見る。なんだかんだ言っても、二人はこんなやりとりを楽しんでいるとは、当人を除く搭乗員全員の意見だ。
「あ、ねえさん。残りは、ちゃんと戻しておきましたから」
「ふぅん？　じゃあもう一度探してみるわ。お騒がせ」
紅蘭が急ぎ足で扉に向かう。あくまで、バナナが気になるらしい。
「じゃあ、あたしももう一度ミッキー達の様子を見て来ますね」
ユマもそれに続いた。
「大介と花子によろしく」
「ミッキーとミニーです。変な名前をつけないで下さい」
女たちのたわいないおしゃべりがドアに遮られる。
「いつもながら、緊張感の無い連中だなあ」
と、リックが苦笑する。
「ところで、報告書は？」そう、続いたリックの台詞に、ギィがモニターを顎で示し、
「しーらないっと」
という言葉を残してカズが退室した。
やがて。
ミーティングルームは、さっきまでとはうってかわった静寂に包まれた。

リックの説教と報告書の書き直しに、五時間ほど費やした。もっとも時間はたっぷりある――ワープポイント到達まで、少なく見積

もっても一五〇時間という見積もりをギィは既に提出していた――ので、良い暇つぶしになったと思えば良い。
既に船は惑星から離れ、ワープポイントに向かっている。
「ミッキーとミニー、見ませんでした？」
「食堂」に顔を出したユマがそんな事を言いだしたのは、惑星を離れて十時間程たった頃だった。
ちなみに「食堂」とはミーティングルームの一角で、パーテーションで仕切られた場所だ。時と場合によっては、「娯楽室」と呼ばれる事もある。
今は、皆がそこで食事をしているから、「食堂」なのだ。
「いないの？」
最初に反応したのは、紅蘭。
入って来たのがリックだとでも思ったのだろう。先刻まで得意げに見せびらかしていたゆで卵を慌てて口の中にほうり込み、むせている。
「いないんです。紅蘭さん、見ませんでした？」
「見てないよ。もしかして疑ってる？　でもあんた、アタシが近づかないように扉に電気ショックの罠を張ったって言ってたじゃない」
確かに紅蘭の「ミッキーとミニー」に対する第一印象は「美味そう」だったが、わざわざ罠まで張るのか。ユマもなかなか、やってくれる。
と、ギィが苦笑する。
そして同時に、言葉にならない違和感を、その時に覚えた。
「鍵をかけ忘れたのか？　一緒に探そうか？」
動物好きのカズが立ち上がると、ユマが嬉しそうに笑う。
「ありがとう。じゃあ、もう一度よく探してみます。お邪魔しました」
「ちょっと待てよ、ユマ」
ギィの声に、ユマが立ち止まった。
「なんですか？　ギィさん」

訝しげな視線を受け、ギィは再び違和感に捕らわれる。
「いや、さっきも様子を見に行ったばかりなのに、また行ったのか？」
「だって、今は他にやることがないし。いけませんか？」
「いけないわけじゃないが……」
なんだろうと、ギィが顎に指をやって考える。
ユマの言動に、引っかかりを感じていた。だが、それが何なのかがよく解らない。
まぁ、長い船旅だ。そのうち解って来るだろうと、結論づける。
「ま、狭い船の中だからすぐに見つかるだろ」
「ですよね。じゃあ」
ユマとカズの姿が消えると、「ふふん」という笑い声が側から聞こえた。
「何か、思うところがありそうだね。おにいさん」
と、やれば出来る妖艶な笑みを浮かべる、紅蘭。それで、ギィもやっと違和感の正体に気がついた。
ユマは今、自分の事を「にいさん」とは呼ばなかった。
「ワープが完了したら、太陽系は目の前だ。だったら、『家族』はお役ご免なんじゃないの？」
紅蘭の言葉に、ギィも納得する。「にいさん」と呼ばれる間に、本当の兄のような気分になっていたが、ユマは所詮は他人だ。
そう、任務を完了したら他人に戻る。それだけの事だと。

「カズくん、帰って来ました？」
再び、ミーティングルーム。あるいは「娯楽室」。時間は、先にユマが食堂に来た時から、二十時間ほど経っている。
船はまだまだ、ワープポイントに到達しない。
半分泣きそうな顔をしてギィたちの前に歩み寄る、ユマ。
「何？　今度はカズが行方不明？　どうなってるの？」
暇つぶしにリバーシをしていた紅蘭が、立ち上がるついでに卓を

ひっくりかえす。重力が少ない船内なので、いくつかの駒が宙にふわふわと浮いた。
　もちろん、相手をしていたギィの視線など気に留める様子はない。
「おい、そこのゴリラ」
「それは、アタシの事かいね？　ハゲ山羊」
「誰がハゲで誰が山羊だ」
「そんなことより」
　と、二人の会話にユマが入って来る。
「カズくんの事なんですけど、一緒に探してくれませんか？」
「いいけど、何処で……」
「あのな、ユマ」
　言いかけた紅蘭の言葉を遮るように、ギィが告げた。
「何ですか？　にいさん」
　再び、「にいさん」の復活だ。何を考えているのやらと、ギィは思う。
「お前さん、何だってさっきから鼠だのカズだのを探し回っているんだ？」
「だって、居なくなったから」
　ギィが、どうにもすっきりしないのは、そんなユマの態度だ。
　紅蘭と喧嘩をしても、グーで突っ込まれるわけではない。別に、殴られたいわけではないのだが、まるで別人のように思える。
　と、いうか。
　不自然だ。
「ここは、宇宙船の中だぞ。何かがいなくなるわけがない」
「だから、気になるんじゃないですか」
「どうしたのよ、ギィ。あんたこそちょっと変だよ」
　紅蘭が、ギィの方こそ不審だと言いたげに眉を寄せる。
「おい、ゴリ蘭」
「喧嘩うっとるんかい！」
　いつものように、即座に紅蘭が反応する。

ユマは顔色ひとつ変える事もなく、そんな二人を見ている。それが、どうにも不自然だと思うのは、考えすぎなのだろうか。
「お前さんのバナナを食べたのは、一体誰だろうな」
結局、バナナは出てこなかった。戻すのを忘れていたのかなと、ユマが首をかしげながら言っていたそうだ。
「そりゃ、大介と花子でしょ？」
「あたしが、戻すのを忘れたから、ですよね？　ごめんなさい」
ギィは、ユマを見る。紅蘭もユマを見ている。
そう。人間なら、ちょっとした気持ちのムラは確かにある。「大介と花子」と言われて怒らなかった事も、口喧嘩にツッコミをもらわなかったことも、些細な事だ。
だが、その些細な事がみっつよっつ重なると、疑惑となる。
吹雪の山荘。孤島の別荘。それ以上に隔離された場所が、このアマテラスではないのか？
鼠がいなくなり、次はカズ。「そして誰もいなくなった」か？
いや、むしろ。
「お前さん、『汝は人狼なりや』って知ってるか？」
ユマはただ、首を傾げている。
「ああ、昔からあるゲームだよね。閉ざされた村の中に狼が混ざっているんだ」
答えたのは、紅蘭。ギィが小さく頷いた。
「狼は、一日に一度、食事をする。村人は、村が全滅するまでに狼を見つけなければならない。だから昼間に裁判が行われて多数決で狼だと決められた者が一人、処刑される。処刑された者が狼でなければ、また狼が食事をする。狼が処刑されるまで裁判は毎日開かれる。ま、ロジックを楽しむ推理ゲームだ」
「何の話ですか？」
ギィが小さく笑う。
「今は、ポリグラフという便利な機械がある。裁判などという、まどろっこしいことをする必要はない。白か黒かは、はっきり解る」

ギィはユマを見ている。ユマもまたギィを注視していた。
そして。ユマは吹き出した。
「本気で言ってるんですか？」
「本気ではないさ。ただの冗談だ。ここにはポリグラフはないが――あえて聞こう」
じっと、ユマを見つめる、ギィ。紅蘭はただ、ふたりのやりとりを眉をひそめながら聞いている。
「汝は、人狼なりや？」
ユマは、迷わなかった。
「イエス」
答えてから、くすくすと笑う。まるで、悪戯っ子のように。
「確かに残りのバナナを食べたのは、私です。お腹が減っていたので」
ユマはまだ笑っている。紅蘭がそっと両手で自分の肩を抱いている。
「もう、良いでしょう？　カズくんを探して来ます」
「そうだな。後で俺も一緒に探す事にしよう」
小さく会釈をして、ミーティングルームを後にする、ユマ。
「ちょっと、ギィ」
ギィの目に映った紅蘭の顔は、おびえていた。
それは、少なくともギィが初めて見る、紅蘭の女らしい顔。怖いものなど何ひとつないような紅蘭にもこんな顔が出来るのかと、こんな場合なのに感心する。
「何が言いたいの？　ユマがどうしたって言うの？」
声すら、少し震えている。ギィだってちゃんと説明出来るわけがない。あそこで「人狼」を持ち出したのだって唯の直感なのだ。
「何が起こっているかが解らないというのは、どうも居心地が悪いんだ」
吹雪の山荘での連続殺人、閉ざされた村に潜む狼。関わらないようにしていても、その中に居ればいずれは巻き込まれる。

それならば。
ギィは紅蘭の耳に口を寄せると、小声で囁いた。
「次に俺に何かあったら、ユマが狼だ」

後編

コンピュータを操作しながら、紅蘭が小さく嘆息した。
エンジニアのギィは、数時間前からブリッジに籠もったままだった。ユマと一緒にカズを探しに行った、その後の話は詳しくは聞いていない。「途中で別れたから」とは、言っていたが……。
あの、思わせぶりな言葉はどうした。
らしくもなく、ものすごく心配していたのに。この憤りは、後で百倍にして返してやらないと気持ちが治まらない。
そんな時だった。船長のリックから、指示を受けたのは。
こういう事は本来、ユマやカズの役割なのだが……その二人の姿が見えないのだから、お願いしたい。と、いう前置きの後でリックは言った。「この船の現在の生体反応を調べてみてくれるか？」と。
カズだけじゃなく、ユマまで消えたというのは、初耳だった。
そう言うと「どうして、カズの時に報告してくれなかったんだ」とリックが大仰に溜息をついていた。
搭乗員たちが暇をもてあましている間、リックはひとりでブリッジに居た。船は自動操縦なので、ブリッジで確認作業をするのはひとりで十分だったので。立候補をする人間もなく、だったらもともと「他人任せ」は苦手なリックがその役を引き受けていた。
報告については、忘れていたのだから今更言われても仕方がない。素直に「ごめん、すっかり忘れていた」と告げると、最後には頭を抱えて「この船の乗務員はどうして、いつも船長を蚊帳の外に置くんだ」と、ごねていた。
そんなもの、統括者は蚊帳の外から人を見る必要があるかに決まっている。そもそも、いきなり「生体反応」を調べようなんて言い出したり、さらには自分でやらないのが、船長（リック）の船長（リック）らしい所だ。
生体反応。
五人に決まっている。だって自分達は地球を発った時からずっと

五人で行動をしているのだから。
苦笑しながら、結果を待つ。コンピュータが出した結果に、紅蘭の動きが止まった。

「ギィ、ユマを知らないか？」
ブリッジで、ワープの最終チェックを行っていたギィに、リックが声をかける。その後ろに付き従う、紅蘭の表情は沈んでいた。
「なんだよ、リックまで」
と、おかしそうに笑う、ギィ。
「いや、仮眠室にもいないし紅蘭に聞いたら少し前に君と二人でカズを探しに行ったと言うから」
「ユマとはすぐに別れてひとりで探した。でも、見つからなかった。ユマもいないのか？」
「紅蘭に、先ほどの結果をギィにも言ってやってくれ」
促され、紅蘭が前に出る。
「現在、アマテラスにおける生体反応は、四つ。何度チェックしても、同じだったよ」
ひとつはブリッジ。勿論ギィだ。そして、二つはミーティングルームに居た紅蘭とリック。
あとひとつはどうしても掴めない。生体反応が指し示す場所に行っても、姿が見えない。なにより、もうひとつあるべき反応がない。
「それは」
と、ギィの険しい目が二人に向けられる。
「ユマが、カズをどうかしたって、言いたいのか？」
「最初にひっかかっていたのはあんたでしょ？　二人でカズを探しに行って、やっぱり見あたらないって帰って来たよね？　で、ユマはどうだったんだよ。ちゃんとした報告もらってないよ」
紅蘭が、ギィに食ってかかる。
心配した分、怒りが百倍……の、筈なのだが。それ以上にショックだったのは、五人のうち、一人が現実にこの船に居ないという事

実だ。
船外に出たのなら、その痕跡は残されている筈。だが、そんな痕跡はどこにも発見できなかった。と、言うことは考えられる事はひとつしかない。
「ユマに聞かないと仕方ないだろう。探しに行くか？」
「いや」
と、リックが首を振った。
「我々は、しばらくこのブリッジに詰める」
「え？」
「ユマとカズには、随時船内放送でブリッジに集合するように呼びかける。だが、ここに居る三人は、今現在からここを出ることは禁止する」
それは、少し困ることになるんじゃないかな。
そう言おうとして、紅蘭がリックを見る。だが、彼の面差しが真剣だったので、紅蘭は言うべき言葉をつげずにいた。

ブリッジに詰めて、何十時間が経過したのかも、紅蘭は忘れた。
そのうちに、誰かが言い出すだろうとは思っていたのだが、誰も言い出す気配がない。そうかやはり女性は不利というわけだ。
間もなく、アマテラスはワープポイントに到達する。
館内放送で、何度も招集をかけた。だが、ユマもカズも姿を見せる事はない。
搭乗員の三人も、リックの指示通りブリッジを出る事はなかった。
そろそろ、限界だということを、紅蘭は知っている。
いや、限界も限界だ。
大体、女性には子宮がある分、トイレは近い。訓練をつんでいるとはいえ、生理現象には限界がある。
一番最初に、「トイレはどうするの？」と聞いておけば、今、限界と戦う必要はなかったのだろう。その場の雰囲気というやつで、言えなかったものは仕方がない。

もそもそと体を動かして、ちらりとギィを見る。
だが、彼は気づきもしない。
いつもはあんなに言いたい放題なのに、こういう時には全然役に立たない。「なんだ、青い顔して。もしかしてトイレか？」とか言ってくれても良いのではないかと、八つ当たり気味に、紅蘭は思う。
それに対する返事は、いくらでも考えてあるのに。
救いの神は、ない。
ならば、仕方がない。
紅蘭は意を決して立ち上がった。
「先生、トイレ」
リックが紅蘭を見て、苦笑する。当人は、全く笑えない状態なのだが。
「許可する。行ってこい」
あっさりと答えるリックに、もう少し早く言うべきだったと思いながらも、口に出来なかった本当の言葉を紅蘭は告げた。
「怖いからついてきて」
普段からは想像も出来ないような、消え入りそうな声だ。自分でも、びっくりだった。
リックがまじまじと紅蘭を見て、吹き出した。
「紅蘭にも怖いものがあるんだな」
「見えないものは、怖いよ」
小さく肩を震わせる。もちろん彼女の震えは、尿意を我慢しているせいもある。
「じゃあ、ボディーガードを勤めよう」
「覗いたら、首根っこ叩き折るからね」
（やれやれ、さすがはゴリ蘭だな）
そんな返しがあると、思っていた。
だが、ギィの口から出たのは全然違う言葉だった。
「おいおい、俺をひとりにするのか？　怖いじゃないか」
「子供かい」

紅蘭のからかいにも、ギィは反応しない。
「らしくないの、オンパレードだな」
やれやれと、リックが嘆息する。
何か、引っかかったが――紅蘭には、それを考える余裕はなかった。ブリッジを出て個室に駆け込む。後ろから付いてくる足音に安心して。

「あら、リックは？」
個室を出た紅蘭を待っていたのは、ギィひとりだった。
「ああ、ついでに調べたい事があるとか言っていたな。一時間後にワープを行うから、先にブリッジに居ておけだと」
紅蘭の顔が、ぱっと輝いた。さっきまでの緊張がゆるみ、安堵の笑みを浮かべる。
「おお、ついに帰れるのか。でも、どういう心境の変化？」
「搭乗員は全員ブリッジに集合するよう、船内放送をしろとさ」
つまり、結局先ほどまでとは変わらないという事か。と、少し落胆しながらも紅蘭は納得した。
ワープを示唆し、二人（一人）の動向を待つという事だ。
だが、定刻を過ぎてもついに二人からの連絡はなかった。それどころか、
「ちょっと、どうしてリックまで戻って来ないのよ」
苛立たしげに、紅蘭が爪を噛みしめる。リックからの連絡は、一時間前から途絶えたままだ。
と。
不意に、笑い声が聞こえた。
振り返った紅蘭の前で、ギィがおかしそうに笑っている。
「あのな、紅蘭」
やっと。
紅蘭は違和感が何であったのかに気が付いた。挑むように、ギィを見つめる。

「この船に乗っていたのは、何人だったかな？」
「だから五人でしょ？」
「本当に、そうだったか？」
紅蘭の目は、ギィから離れない。背後でドアが開いた事にも気づいていない。
「ギィ、さっきからアタシのこと紅蘭って呼んでるよね？」
「お前は、紅蘭だろ？」
「お前」と、再び紅蘭が呟く。
ああ、と、ギィが少し笑った。
「ギィは、お前を紅蘭とは呼ばなかったのか」
数歩、紅蘭が後じさる。
「ギィは、自分が戻って来なければ、ユマが狼だと言った」
ギィが、その紅蘭に詰め寄った。二人の距離が縮まり、ふたたび紅蘭が後退する。何かの気配を感じて振り返った紅蘭の目が凍り付いた。
「俺も、お前を初めて見た時に思った。美味そうだって」
前門も後門も、狼。逃げ場がない事は、解った。
そう、やっと解った。この船に乗っていたのは、五人ではない。
ここで、本物のギィなら「汝は人狼なりや？」と言うのかな。そんな事を考えながら。
紅蘭は最後の言葉を吐いた。
「そりゃ、相思相愛ってやつだね」

惑星探査船「アマテラス」は、間もなく太陽系にワープする。
エンジニアであるギィの記憶を読み取ったので、操縦に関しては特に問題はない。
地球人により識別された番号は、γ―〇〇八一―三五七八―K。
「アマテラス」乗員により「鼠王国」と名付けられた惑星だが、そこに住む者にとっては「名前」など意味はない。
精神感応力、そして非常に優れた変身能力を持つ、小動物。地球

人類に「かわいい」と呼ばれ「知的生命体」とみなされなかった、彼ら。

『ミッキー』及び『ミニー』と名付けられた動物は、今は人間の姿をしていた。

やや長い旅にになるが、幸い食料はたくさんある。母星に居たままでは、いずれ来る食料難の為に海に入るのもやむを得なかっただろうに。

はるか母星を離れた新天地に、さらなる栄華の夢を求めた彼らを乗せて。

アマテラスは、やがて地球に到達する。

―了―

後編（後書き）

この小説を書くにあたり、「キャラクターの口癖」や「特徴」をしっかりはっきり持っておかないと破綻するな、と、思いました。
だから、ある方々に了承を取り、イメージ的なモデルにさせて頂きました。
あくまでイメージですが、一部にその方々の名前も使わせて頂いております。
おかげで、キャラがすごく生きている作品が描けたと思っています。
ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3025i/

汝は人狼なりや？

2010年10月8日15時26分発行